

『華嚴經』 『涅槃經』 と佐々木月樵

織 田 顕 祐

大谷大学との出会い

みなさんこんにちは。織田でございます。仏教学科とゼミの卒業生の諸君から最終講義をするよう言われましたので始めたいと思います。私は十八歳で京都へ来て、幸運にも六十五歳の今日まで大谷大学から離れることなくずっとお世話になりました。やっていることは仏教の研究だけです。学生時代と変わらないのですが、いつの間にか私の方から給料を頂く方になり、何か変だなと思っっているうちに定年になってしまったのです。その頂いたご恩をどのように返していったらいいのか分からないのですが、私はこの大谷大学でいったい何を頂いたのか、そしてこれからどうしようと思っっているのかを皆さんに聞いていただき、自分のケジメにしたいと思っ、今ここに立っております。引越しのために研究室の本をすべて整理してしまつたので、資料を探すこともできません。それで振り返りながら思い出したことを書き記したものが本日のレジュメです。

私は、昭和四十八（一九七三）年の入学です。その頃大谷大学は今のような学校ではなく、この赤レンガと一号館、体育館が主なものでした。私は愛知県の田舎の寺に生まれたのですが、父親や寺との相性が悪く、自分の将来をそこに見ることができず、父親とぶつかっておりました。大谷大学へ行って仏教に関わり一生生きていくことになるとは

夢にも思っておりませんでした。青春特有の様々な葛藤や挫折があり、人生に対する疑問がいろいろとあって、ある時父親にそれをぶつけたのです。すると父親は「京都に大谷大学というところがあるが、お前は知っているか」と言ったのです。父親は大谷大学の卒業生ではないのですが、大谷大学に憧れを持っていたのかもしれないかもしれません。お前は大学を知っているのかと聞いたのですね。私はその時失礼ながら知りませんでした。すると父親は「汽車賃を出すから京都に行つて見てこい」と言ったのです。それで私は新幹線代をもらつて四番の市電に乗つて見に来たのです。その頃の大学は、周りがずっと木に囲まれていて、木々の中から赤レンガが見えて、とても静かで落ち着いたものでした。烏丸通に市電が走っているような時代です。烏丸通の大学の前に市電が止まるシマのようなものがあつて、すぐに大学に入るといふ感じでした。冬休み中だったので中には入れなかつたのですが、大学を一周回つて「落ち着いた学校だな」と思つて帰りました。その時高校三年生の冬でしたから、いろいろと混乱していました。自分は仏教のこと、寺のことを何も知らないくせに嫌つたり厭つたりしてきたが、それではあまりに無責任ではないかと思ひ、「ちよつと仏教に触れてみて、これはもう要らんと思つたらそれから出直してもいいじゃないか」といつた、不遜で思ひあがつた気持ちで入学したのです。入学して洗心学寮に入りました。その頃の学寮は六畳に二人ずつ住んでいたので、相方は同じ仏教学科の同級生で石川出身の平崎君という人でした。同じクラスで一緒に勉強することになり、仏教学科で最初に出会つたのが鍵主良敬先生でした。今の助教の先生より少し上ぐらいだつたと思いますが、私から見れば非常に落ち着いた先生でした。今でも担当する人間学Ⅰの授業で、その先生との出会いについて話すことが多いのですが、一つの謎かけみたいなものを頂戴して、平崎君と一週間議論したのですがさっぱりわかりませんでした。それがショックでそれ以来「変な先生だな」と思うようになり、「あの先生が仰つたことは何だろう」とずつと考え続けて今日に至つたというわけです。その時のことは以前同窓会の『無盡燈』に書きましたのでそれを読んでいただければと思います。とにかく、高校生までの私の常識やモノの考え方は全く違ふ、さっぱり分からない「巨

大な謎」に出会って、「変なところに来てしまったな」というのが最初の太谷大学との出会いです。

鍵主先生に出会って、それから今日までずっと面倒を見ていただくことになりました。親よりもずっと長いと言いますか、先生を通して出会ったこと、教えていただいたことが自分の基礎や力だと正直に思います。今日講題に挙げました佐々木月樵先生との出会いもそこにあります。太谷大学は旧制の伝統を持つ大学で、戦前から講座制というものがあり学生はその枠組みの中で専門教育を受けていました。完全に縦割りになっていたのです。それが昭和三十八（一九六三）年に学科制となり、そこから改編を重ねて現在に至るのです。講座制の影響がまだ残っている時代の第四講座として、華嚴の講座というものがありません。その講座は学科制に移行する時、専門課程の学科科目の一つとして「華嚴・法相」専攻として再編されました。それを担当されたのが山田亮賢先生でした。鍵主先生は山田先生の教えを受けた先生です。そして山田亮賢先生は佐々木月樵の甥にあたる方です。佐々木月樵先生は愛知県安城市にある山田姓の願力寺の次男に生まれました。それで月樵先生は養子に出られ、その養子先が佐々木姓の上宮寺という寺で佐々木月樵という名前になられたのです。それで山田先生は、直接叔父さんに教えを請うことも度々おありになつたそうです。有名な大正十四（一九二五）年の入学宣誓署名式の佐々木先生の告示「太谷大学樹立の精神」は入学が一年早くて直接は聞いていないようですが、ちょうど同時代の先生だったのです。山田先生は私が入る頃にはすでに定年退職されており、名誉教授として大学院だけ授業があるという時代でした。それで山田先生は下鴨の自宅に有志を招いて、毎週金曜の夜に三時間ほどの輪読会を持たれていました。「浄眼洞」という名前の学仏道場です。それは山田先生が京都から安城のご自坊に帰られるまでずっとありました。

山田亮賢先生はちょうど激動期の太谷大学で学ばれた先生ですから、自分の恩師である曾我量深先生や金子大栄先生についてたびたび浄眼洞で語られるわけです。曾我先生も金子先生も元々は仏教学を学ばれた方で、曾我先生は唯識、金子先生は華嚴という学問をなさってその上に真宗学を開いていかれた先生ですから、山田先生も同様にご自身

が唯識と華嚴をやっておられた。浄眼洞では賢首法蔵の『華嚴経探玄記』という『華嚴経』の注釈をずっと読んでおられました。当初私はあまり関心がなかったのですが、同級生が「織田、行くぞ」と言うので何うようになりました。その頃の私は未だ本当の意味で学問に関心があつたわけではなく、一番関心があつたのはスキーでした。冬になるとずっとスキー場へ行き、十二月頃から学校を離れて長野県の民宿に住み込んでスキーばかりやっていたのです。それで鍵主先生からはひどく叱られました。私も若かったですから、せっかくの先生の指導も馬の耳に念仏で、スキーばかりにかまけておりました。思えば私は自分で積極的に浄眼洞に行ったのではなく同級生に誘われるのでそこに行くという、まあ金魚の糞のような感じですつと行つておりました。山田先生から曾我量深や金子大栄、清沢先生のことを事あるごとにお聞きしました。聞熏習というのでしょうか、私の関心の有無とは無関係に皮膚を通して自分の中に入り込んできたような気がします。山田先生が亡くなった今も浄眼洞は続いており、年に一回集まって自分たちが今考えていることを喋ったり聞いたりしています。

このように、私は山田先生から佐々木月樵、曾我量深や金子大栄、清沢満之といった先生の話を知りました。が、当時の大学は清沢満之先生について今のような受けとめ方ではありませんでした。このことは古い方々なら皆わかると思いますが、清沢先生の「臘扇忌」という法要は大学の行事ではなく、有志が行うものでした。というのも大学の中には清沢先生を学長として認めないという方がおられました。清沢は学監であつて学長ではないと盛んに言つて、学長でない者の法要は有志で行えばいい、という意見が半分くらいだったように思います。今のよう「臘扇忌」が大学行事として厳修されるようになったのは小川学長の時からです。私が学生の頃は清沢先生を学祖として仰ぐという風潮は表立ってはなかつたわけです。先輩方は佐々木月樵が学祖であると皆仰っていました。私はある時、櫻部建先生から手紙をもらったことがあります。「大谷大学は最近清沢満之を学祖と言っているようだが、我々の時代はそんなことを言つた覚えはない。我々の頃は佐々木月樵を学祖と言つていた。それがいつから変わったのか説明

してほしい」という内容でした。大谷大学は古い伝統のある大学ですから、文献・証拠に基づいて正確にモノを考える先生と、事柄をしっかりと考えた上でその心を大事にする先生との二通りがぶつかっているという雰囲気がありました。現在、その雰囲気は徐々に整理されて一つになったのか、それとも忙しくなって薄くなり念頭から消えたのか。私は後者だと感じていますが、今はこのことを改めて問題にする人はいないと思います。今となっては昔のことですが、大学の理念に関わることでですから、聞いてくださる方々には申し上げておこうと思つてレジユメに書いておきました。山田亮賢・鍵主良敬という大谷大学の華嚴教学の学系は、古い歴史を持つ伝統的なものです。しかし、我々の頃は「やれ自分は何学専攻だ」といった特別な感覚は少なく、鍵主先生と勉強をするという感じでしたが、元を尋ねればそういうことです。

それともう一つ、私の大きな基礎となったこととして、「大藏経學術用語研究会」というものがあり、偶然そこに参加したことです。ご存知のように『大正新脩大藏経』という文献があります。今はインターネットの中のテキストデータベースとしてパソコンで利用できるようになっていきます。非常に簡便になりましたが、昔はすべて活字の本でした。仏教学科で勉強する人はまず大藏経をコピーしてチェックしながら読むという感じでした。大藏経はすべて漢文で書かれてあり、一般の人にいきなり利用できませんから、大藏経の中の學術用語を整理して索引にするという事業が始まったのです。これは私が大学に入るずっと以前に始まっていたのですが、仏教系の六大学つまり関東は駒澤・大正・立正、関西は高野山・大谷・龍谷という六つの大学が集まって、學術用語研究会を組織したのです。大谷大学も旧制大学の雄のような存在ですから、責任を持ってそれに参加するということになり、関係する先生方がずっとそれに携わってこられたのです。私がちょうど入学した頃に現場を指揮していたのは、古田和弘先生でした。古田先生が現場監督で、現場監督補佐が前学長の木村宣彰先生でした。その時、木村先生は私が入寮した洗心学寮の寮監でした。新人生の後期だったと思います、ある時木村寮監が、「織田君、ちよつとこれ書いてくれないか」と言われて

カードを渡されたのです。当時、寮は大学の中にありまして、その裏に作業場がありました。「何だかわからないが、いつまでも電気がついているな」と思っていたら、夜寮監先生からお呼びがかかったというわけです。それがきっかけとなって、いつの間にかそこに深く関わることになったのです。『大正新脩大藏経』を見た人ならお分かりだと思いますが、一頁が三段になっていて、大体一五〇〇字くらい漢字が並んでいます。約千頁で一冊となっています。その二冊をまとめて一冊の索引を作るために、約二〇〇〇頁の本文を読んでその中から大体十五万から二十万語を選び、全てをカード化して各用語の意味内容を分類し、それを全部五十音順に配列して原稿化し、印刷所へ持ち込んで出版するのです。これを六大学で分担し、各校はほぼ三年に一冊のペースで作業を進めるということでした。

私は最初学部生でしたから、既に誰かが読んで線の引いてあるところをカードに書き写すと言われたのです。カードが二〇〇枚くらい入った箱を預かって、それを一週間でやるよう言われて、持っていくと次の箱を渡されるのです。その繰り返しです。延で一〇〇人かかる計算です。最初はカードを書き写す作業でしたが、大学院生の頃から新しい索引に取り掛かるようになると、読んで線を引く作業をするよう言われました。大藏経の二〇〇〇ページ分を五人で分担すると、一人四〇〇ページだから、夏休みに四〇〇ページ読んで線を引いてくるよう言われるのです。夏休み中かかって始めから終わりまで読み、一ページあたり七〇から一〇〇ほど線を引いて持っていくわけです。自分の専門とは直接関係ないものがほとんどですが、とにかく読むよう言われて、大藏経の原文と図書館所蔵の版本を大量に渡されるのです。学年が上がるにつれてカードを整理する作業やカード書きの学生を探すことも担当することになりました。それに関心のないものも読まなければなりませんので、それが結果的には自分の裾野を拡げてくれたのではないかと考えています。

大藏経学術用語研究会は既に解散して存在しませんが、振り返ってみれば私は先生がたに遊んでもらったのだと思います。一緒に作業することがとても楽しかったのです。作業そのものは大変でしたが、先生方と一緒にあってあれ

これ言いながら課題を与えられてやるのは大変でしたが楽しかったです。だから続いたのだと思います。それを思いますと、時代が変わり徐々に様々な用事が増えて、学生と接することに十分に時間を確保することが難しい時代になりました。私たちが遊んでもらったほどには学生と遊んでいないという気持ちが強いです。ですからこれから大いに遊びましょう。

古田・木村両先生は山田・鍵主先生とは少し違って、横超慧日先生という『法華経』『涅槃経』の大家から薫陶を受けられた先生方です。私はこの木村先生や古田先生を通して横超先生の研究方法を学びました。これは山田先生のような主体的・実存的・求道的な研究方法とは少し違って、もう少し文献中心の研究法でした。横超先生が授業中常に仰っていたのは、「君たちは親鸞の思想を勉強しているだろう。もしそうならば曇鸞と『涅槃経』をやらなければダメだ」ということでした。それが私にはずっと頭に残りました。後に『涅槃経』に専心していく素地といきましょうか、『涅槃経』を学ばなければならない」ということは、その頃横超先生から教わりました。

横超先生はご高齢でしたから、古田和弘先生のもとに学生が集って『涅槃経』を輪読するということもありましたが、私はその頃大藏経のカード書きや線引きが当面の課題でしたのであまりそこには出なかつたのですが、後にお世話になるようになりました。そういうことが大学院、そして研究を志す一つの基盤かなとも思います。懐かしくて楽しいそんな時代でした。また、学部のゼミでは鍵主先生が『大乘起信論』を取り上げておられました。『大乘起信論』を勉強しようと思うと、中国人の解釈を勉強しなければならないと思っていましたので、法蔵や淨影寺慧遠、新羅の元暁らの注釈を同時に読み始めました。その時お世話になったのが一色順心先生です。一色先生も『大乘起信論』を学んでおられたので一緒に勉強しました。そこから法蔵の先生である智儼という人を知って、智儼の研究を志すようになりました。この研究はその後ずっと続き、大学院時代から三〇年ほどノロノロとやった結果が『華嚴教学の成立に関する思想史的研究』という博士論文になり、それが『華嚴教学成立論』という著作になったのですが、非常に

時間がかかりました。時間はかかりましたが何とか自分の考えていたことは整理できたと思っています。

### 「教行信証の三部経」という発想

以上のような『華嚴経』研究はいわゆる伝統的な華嚴教学による『華嚴経』研究でして、中国や日本、朝鮮半島の華嚴思想を勉強をするためにはこれが基礎です。一方で佐々木月樵先生は伝統的な華嚴教学による『華嚴経』研究とは全く異なる独自の発想から『華嚴経』を学ぶ道を開いていかれたのです。私はこれを後になって知りました。二番目に「教行信証の三部経」という発想と書いておきました。これは佐々木月樵先生が自分の書物の中でこういうことを言っているのです。私は山田先生の浄眼洞の会は友人に引つ張られて義務感で行っていたわけですが、ある時の浄眼洞の会で佐々木先生が大谷大学の学長になる前にヨーロッパ・アメリカを一年間ほど視察に行かれたことを知りました。後に「大谷大学の樹立の精神」が生み出される基礎がここにあります。佐々木先生が残した視察日記が上宮寺に残っていたのです。佐々木先生が養子に入られた上宮寺は、三河三ヶ寺の一つという非常に大きな寺で、愛知県の東の三河地方の中でも特別に大きな寺です。その大きな寺には宝物がたくさんあったのですが、ある時火事が起こり全て燃えてしまいました。ただ、日記だけは山田先生が借り受けていたために焼けずに残ったのです。その日記を山田先生が浄眼洞で読みたいと言われて、誰かが叩き台を書いてきて皆で読むことになったのです。その解読結果は冊子にして全部図書館に入れてありますので、見たい方は図書館で調べればすぐに出てくると思います。二セツト図書館に寄贈しました。その欧米の視察日記は大正十(一九二二)年から十一年にかけてのものです。佐々木先生がその視察に行かれたのには背景があります。

大谷大学は、皆さんご存知のようにもともと江戸時代の学寮に始まるわけですが、学寮とは僧侶の専門学校・養成所です。これが明治二十九(一八九六)年ですが、真宗大学と高倉大学寮に分かれ、佐々木月樵先生はその真宗大学

に入るわけです。真宗大学はその後東京へ移り、明治四十四（一九二一）年に京都に戻り、そこから七・八年経つと文部省から「大学令」が公示されました。日本に大学を整備するということで、それまでの帝国大学に加えて私立大学を整備するというのが起こります。それが大正七（一九一八）年です。当時の大谷大学は真宗大学といっても僧侶のための専門学校でした。それで、どうしてそういう学校が一般の人を受け入れなければならないのかと、喧々諤々の議論になったのです。その議論の中心にいたのが佐々木月樵です。伝統的な考えといましようか、真宗大学が本山東本願寺を離れて東京に行くこと自体に反対の人も多くいたわけです。もう一度ここで専門的な僧侶を育成すればいいと考える人と、一方でこれからは大学として学問を開いていかなければいけないと考える人がぶつかり、その結果最終的に大学令による大学を申請していくわけです。その過程の中で佐々木先生は『教行信証』の三部経ということを言い始めるわけですから、「佐々木は異安心ではないか」という意見があつたそうです。嘘か本当か分かりませんが、ある先生は命まで狙われたのだと言っておられました。私は寺川俊昭先生にそのことの真偽を尋ねたことがあります。「私もそう聞いたことがあるが証拠はない」と仰っていました。それで緊急避難のような意味もあつて外国視察に行かれたという話も聞きました。真偽を確かめる方法はありませんが、状況的にはそういう面があつても変ではないような時代だつたようです。そして一年ほどヨーロッパからアメリカの教育と宗教の視察に行つて帰つてこられたのです。その日記が綺麗に五冊そのまま残つていたのです。手帳のようなもので、それを全部コピーして順番に解読していきました。どこで誰に会つて何を見たとか、ある書店に行き「これをぜひ大谷大学に入れるべきだ」とメモを取るなど、一日一日の様子が詳細に書かれています。その視察の中でも特に強い関心で見おられたことは、ヨーロッパにおける宗教と大学の関係や、研究法と人々との繋がり、学生の学び方や建物の配置などです。「この学校のこの先生に大谷大学のあの学生を学ばせてみてはどうか」ということや「この先生の教えは是非必要だから、誰かここへ送り込んでもらう必要がある」といったことを細かく書いておられます。そこから私が

感じたことは、細かいこともありますが、大谷大学に対する強烈な熱情です。講堂へ行きますと正面に三幅の絵が掛かっていて、月樵先生は一番右側の洋服を着て蝶ネクタイをしたオシャレな人です。また当時の写真を見るとプロレスラーのような体つきなのです。そんな先生が、学長になるとすぐに亡くなってしまふのですね。一体何故なのかとずっと考えておりました。先生の熱い心をその日記を通して感じました。たぶん不眠不休で取り組んでおられたに違いありません。そういう情熱が「樹立の精神」の背景にあることがよく分かりました。読んでいくと外国の古い大学の歴史や自分が現在見ているヨーロッパの大学の在り方などが重なり合って、後に「樹立の精神」が出てくるということが見えてきました。

そこで俄然「大谷大学樹立の精神」というものに強い関心を持ったように思います。「樹立の精神」は学生手帳にも載っていますから読もうと思えば簡単に読めるのですが、「樹立の精神」だけでも複数の版があるのです。学生手帳に載っているのは全集版だと思えますが、月樵先生が自分で書いた原稿や、それに暁烏敏が手を加えたものも残っています。また学生用だと思えますが、今でいうところの学生便覧、当時は「要覧」と呼ばれていたようですが、そこにも全集版とは少し異なるものが載っています。それらをよく読んでみると少しずつ違うのです。何故違うのか疑問に思い、ますます「樹立の精神」の背景を知りたいと思うようになりました。その中の要覧本の上に、「最後の受難に打ち勝った」ということが出てくるのです。他の版にはないのです。佐々木学長が「樹立の精神」を告示するに当たって、「最後の受難に打ち勝つ」とはどういうことなのかと疑問になりました。それで、大谷派宗門と大学の歴史をずっと見ていきますと思いがたることが浮かびます。佐々木先生はヨーロッパ視察に行く時、本山の護法場の方を巡って暗殺された關彰院東瀛という先達の肖像と清沢満之の写真と阿弥陀仏を三具足にしてずっと持っていたという報恩の人です。その殉教精神というのでしょうか、仏教をいかに受けとめるかについて衝突があり、時として血を流すようなこともあった。そういうことを咄嗟に感じて言われたのかも知れません。ご自分の原稿や全集版に

もないのですが、要覧だけに最後の受難に打ち勝つてこの宣言をしたということが書かれてあるのです。このことは山田先生にもお尋ねしましたが、その間の事情は分からないとのことでした。それで、これは一体何だと思いがら六巻ある『佐々木月樵全集』を読んだりしていました。『佐々木月樵全集』は全集ですからテーマごとに編集してあり編年体にはなっていないません。それでもう一度自分で組み立て直して時間軸で読んでいく必要があったのですが、「樹立の精神」の背景、親鸞の『教行信証』や『華嚴経』を独自の発想で追求されたのはなぜかということが、全集を時間軸で読んでいくうちに少し見えてきたのですね。

佐々木先生は、先ほど申し上げた真宗高倉大学寮と真宗大学に分かれたときに、真宗大学に入られたのです。真宗大学に入られたのですが、真宗大学と大学寮の先生は重なっていたようです。ある時、大学の先生に「無明とは何ですか」と質問したところ、「天台ではこう言う、華嚴ではこう言う、唯識ではこう言うのだ」とお答えになったそうです。納得できないのもう一度同じ質問をすると全く同じ答えが返ってきたのだそうです。それで月樵先生は、知識としてはそうだが自分の思想になっていない。これが現在、宗教、仏教が振るわない原因だと思ったというのです。それで、自分で考えを深めていくしかないと考えられたようで、最初に親鸞聖人の研究から始められたのです。教えというか、法というものは人を通して明らかになるものですから、「人と法」という視点に立って、具体的な人とその人を支えている目に見えない真理という二つの面からまず親鸞聖人の人となりを研究していくわけです。そこから次に法の研究をする。そこで『教行信証』を何のフィルターも通さずに読んでみると、そこに一つの大きな脈々と流れている大乘仏教の川の流れのようなものがあると気付かれたのです。それまでの仏教の研究は、やれ天台だ華嚴だ唯識だと言って、研究の方法もあらかじめ決まっているわけです。この經典はここが名所であり、こことその関係が大事であるといったことがはじめから決まっています、それを覚えるのが勉強だということになっていたのです。「樹立の精神」にも書かれてありますが、学問とはそういうものではないことをご自分で構築していったわけです。

一人でやられたわけではないですが、金子大栄などの多くの先生と一緒にやっていかれたわけです。佐々木先生はその道を開くとすぐに亡くなってしまいました。佐々木先生の薫陶を受けた山口益・宮本正尊という先生がその後の仏教学を担われ、西の山口、東の宮本ということになって、近代的な仏教学研究を開いていくわけです。

それはそれとして、佐々木先生の全集を読み進めていくうちに、華嚴教学の眼を通した華嚴ではなく、『華嚴経』そのものの命をもらうという発想、また『教行信証』にも長い宗門の伝統がありますが、そこから自由になった『教行信証』の学び方を開こうとされたのです。その過程で『教行信証』の三部経ということを行い出されたのです。こんなことを言うので異安心扱ひされたのです。『教行信証』に三部経などない。三部経と言えば浄土三部経である。佐々木はおかしい」という批判を受けたそうです。『教行信証』の三部経、それは『無量寿経』『華嚴経』『涅槃経』の三つが『教行信証』の基盤であるという考え方です。

### 『華嚴経』と『涅槃経』

鍵主・山田先生から教えていただいたようないわゆる伝統的な華嚴教学の研究法と横超先生に教えていただいたような『涅槃経』の文献的な研究法、これらが私の中で重なってきて、『華嚴経』研究と『涅槃経』研究が自分の課題としてはつきりと決まってきたのはまだ最近のことです。そんな古い話ではありません。そういうわけで今日に至るわけですが、その過程の中で三十年続けてきた華嚴教学研究、これは日本だけではなく中国・朝鮮・日本という三国にわたる華嚴教学研究というものがはつきりとありまして、これは日本には随分古く伝わったものです。奈良時代にはすでに伝わっているのです、日本の華嚴学研究は非常に長く古く早いです。しかし、古ければよい、早ければよいかといえませんが、面があるのです。これは最近気が付いたことなのですが、『華嚴経』は大きく言うと『六十卷華嚴経』と『八十卷華嚴経』の二つがあつて、大体二五〇年から三〇〇年ほどの時間的なずれがあります。

先ほどから申し上げている法蔵という人は唐の早い時代の人ですから、古い六十卷の『華嚴経』を研究し、『五教章』や『探玄記』などを書いたわけです。それが比較的早く日本に伝わってくるわけです。それが奈良に伝わってきた日本の華嚴教学の伝統になります。一度それが伝統になると後にほとんど修正されることなく、最近までずっと繋がってくるわけです。その法蔵の晩年ですが、則天武后の時代に八十卷の『華嚴経』が訳出されます。おそらく法蔵が一番よく知っていたと思いますが、『六十卷華嚴経』は經典として若干不備なところがあつて法蔵は様々な方法でそれを修正しようとしています。時代もずいぶん経っていますのでもう一度新しい經典を作り直してくださいと、則天武后に進言したのだろうと思います。まるで見てきたかのように言っていますが、いろんなものを読むとそういうことを法蔵が言ったのではないかと思われる点があるのですね。則天武后は当時の中国の皇帝ですから、莫大な資金をつぎ込んでホータン、于闐というところからテキストと翻訳する実叉難陀という人を呼び寄せて、洛陽で新しい『華嚴経』を作るのです。その後法蔵は、他の外国三蔵の訳場で新しい經典の翻訳に忙殺されながらも亡くなつてしまいました。ですから『八十卷華嚴経』の注釈を自分で書きたかつたのだと思いますが、その時間がなくなつてしまいました。その後を受け継いだのは澄観という人なのですが、澄観は法蔵よりも少し後の人で法蔵とは直接面識がなく、法蔵のものを読みながら『八十卷華嚴経』を研究しようです。その注釈を比較してみますと、やはり澄観の注釈の方がずっと『華嚴経』の本質に迫る、という感じがします。しかし、日本ではあまり澄観を研究するという雰囲気になかつたのですね。華嚴といえば六十卷、法蔵というのが基本ですから、それが伝統となつて江戸時代の学寮でもずっと勉強されてきました。今でも華嚴といえば東大寺、東大寺といえれば法蔵・『五教章』『探玄記』というのが基本のように受けとめられています。ところが『六十卷華嚴経』でここはどうなんだろうと思う箇所を八十巻で見ますと、よくわかるように明確に訳されているんですね。ですから、これから華嚴教学を勉強する人は別として、『華嚴経』自体を勉強しようとする人は、『八十卷華嚴経』を読んだほうがいいと思います。何を申し上げたいかと

いうと、そういうことがあって法蔵を中心とした日本の華嚴教学研究、これ自体に関心があるならば大いにやるべきですが、『華嚴経』そのものとはどうも違うな、という感じが今はしているのです。

『華嚴経』といえば一即一切とすぐ言われます。確かに『華嚴経』の中にそのような言葉は出てきますが、法蔵が使うような文脈で出てくるわけではないです。全く違うと思います。この点について、法蔵という人は經典の言葉の中から自己の哲学を組み立てたわけですが、經典の方は哲学の話をしているのではなく、如来とは何か、如来と人間との関係はどういうことか、といったことが根本の問題となっています。そういうところから出てくる言葉なのです。ですから私は智儼・法蔵の研究をずっとやってきまして、ある時からそれまでの自分の考えを改めなければならぬと思うようになりました。六相円融という課題が法蔵の一番大きな課題だったようですが、これは釈尊以来の縁起觀の再解釈であると思います。しかし、その問題にしても智儼の言い方のほうがずっと原意に近いと思います。それで、もう生きる時間も短いことですから、法蔵の研究はもう止めようという感じがしています。これについては中国の華嚴教学が朝鮮に渡り、日本に渡り、そこからまた何百年も伝統がありますから、やることは山のようにあります。まだ発掘されていない文献もお寺の藏などに多くあると思います。そういうことに関心がある方もたくさんおられますから、その方々にお任せしようと思います。僕の友人の韓国の先生は、そうした文献の調査が本当に好きで一生懸命なされるのですが、經典そのものや思想には全く関心がないと言っています。隠れた典籍を発掘することや、そこに書いてあることが他の時代とどう違うかといったことに関心のある方にとってはまだまだ山のようにやる可能性があります。私はそれは置いておこうと思っています。

ある時、『華嚴経』というものが形をとってくるわけですが、それが大乘仏教のどのような流れの中で何を課題にして出てきたのか。こういうことを知りたいというのが課題になってきたわけです。ですから古代中国の思想家が經典を読んで自己の哲学・思想として構築した華嚴教学と、『華嚴経』そのものが言いたいこととは少し違うのではな

いかと思っっているのです。こんなことは織田の寝言だと思っただけはいいいのですが、私はそう感じています。親鸞の『教行信証』などを読んでもそういうふうに思います。親鸞は比叡山で二十年勉強されたわけですから、比叡山の天台教学や南都の華嚴教学を知らないわけがないですね。比叡山は南都との交流がありましたし、『法華經』や『華嚴經』の研究を知らないわけではないのですが、そういったことは『教行信証』の中に出てきません。そうではなくて經典そのものからエネルギーをもらっているという感じがします。私は先ほど仏教学科主任が紹介してくださいました通り、二〇一六年度に大学の助成金を頂いて『華嚴教学成立論』を出していただきました。御礼を申し上げますが、これは私にとつては既に過去のことであり、かつて抱いていた疑問に対する一つの結論であつて、自分の中の疑問が大体ほじきましたというものですから、これから先これについて新しいことをやっつていこうとはあまり考えていません。内外には華嚴教学に関心をお持ちの研究者も多いですから、交流しないというわけではないですが、自分の限られたエネルギーを全部ここにつぎ込んでいこうとは到底考えておりません。中国の思想家が所与の經典を讀んで組み立てた思想と、經典が徐々に一つのまとまった形になつてそれが言おうとしていることとは必ずしも重ならないな、と今考えているところであります。

それで、改めて佐々木先生の言う『華嚴經』の研究法が重要であると思つていられるのです。これまで誰もそんなことを言つていないのですが、少し前に『佐々木月樵全集』にそういうことが出ていることに気が付きました、ここ五年くらいはそれに集中しておりまして、『仏教学セミナー』などに掲載された論文はこの問題についてのものばかりです。佐々木先生は学長になつてすぐに亡くなりましたので、本当に自分がやりたかつたことはもつと先があつたと思います。『涅槃經』のことなど何もなさらなまま亡くなりました。『華嚴經』についても短い論文をいくつか書かれただけです。ですから結論的なものは出しておられません。私はせっかく佐々木月樵という人が命を懸けて開いてくれた經典研究法、そういうものを現代の方法論に落とし込み、そしておそらく月樵先生はこんなことがやりたかつ

たのではないか、といったことをやっていきたいと思っていますところですよ。

今日ここに来てくださったっている卒業生の方々は「ひたすら『涅槃経』を読まれた」と思っていることでしょう。なぜゼミで『涅槃経』を読まれたのか。実はそういう私自身の課題があったので君たちに付き合ってもらっていたのです。横超先生が親鸞を学ぼうとする人は『涅槃経』を学ばねばならないと仰っていたことは以前から感じておりましたので、個人的には、当時の大学院生諸君と何度も輪読会を続けていました。ある時、仏教学科からゼミを担当せよと言われたときに、一度学生諸君と『涅槃経』を読んでみようということでも始めたのです。古田先生が輪読会で『涅槃経』をやっておられました、私はその頃大蔵経の索引にかかり切っていましたのであまりそこに出ることができませんでした。その後古田先生も定年になられ、そうこうしているうちにゼミを担当することになったのです。その時、これはもう『涅槃経』をやろう。分かっても分からなくてもいいからやろう、ということでも皆さんと一緒にやり始めたのです。もう何年やったか分かりませんが、全部は読めませんでした。それでも『涅槃経』の一番大事な問題提起の部分である前半十巻くらいは読み込んでいたかなと思います。その後、ゼミで学んだ学生諸君の中に大学院へ進学した人もおり、『涅槃経』で論文を書く人が何人か現れました。それで私自身本当に勉強になったのは大学院の人が書いた論文の口頭試問です。中にはこの論文はどうしてもおかしい、論理の通らないことが書いてある。一応纏まったように見えるけれどもおかしい。しかし何がなぜおかしいのかがきちんと説明できない、というのがこちら側にあるわけです。そうなると経典を読み直さなければなりません。こちらでも必死です。口頭試問までに「この論文のこの箇所がこうおかしい」と言わなければいけません。もう追い詰められてぎりぎりのところで読んでいくと、読めなかったところが読めたり、見えなかったところが見えるようになるのです。不思議ですね。ある学生のある論文のある考え方がどう考えても間違っていると言うために、なぜ間違っているのかということとを正しく論証しなければいけないので、追い詰められたような感じで一生懸命読んでいたらさっとほどこけたことがあります。そこから

『涅槃經』の構造や読み方が開けたということがありました。これは自分だけでやっていたら気が付かなかったことが学生の論文のお陰で気づけたのです。もし学生の論文が非常に優れていたらそういうことにならなかったかもしれません。何か根本的な問題を抱えていたために、こちら側が開かれたのです。非常に有り難いといましようか、学友とはこういうことかと思いました。そんなことの連続でした。先生に出会ったのと同時に学生諸君と一緒に読んだり学んだりする中から、気づいたり開いてもらった。これは本当にそういう実感を持っています。自分の考えて研究を進めてきたというよりは、目の前にあることに対してわからないままに一生懸命やっていたら徐々に広がって来た、そういう感じが強いのです。ですから今日は皆さんによく一緒にやってくださいましたと心の底から御礼が言いたいのです。そして御礼だけでは不十分ですから今後お前はどうかということですね。先程、ある人から「今日の講義は集大成ですね」と言われましたが、「集大成はできません。今日は中間総括です」と答えたばかりです。

#### これからの課題

一つめは先ほどから申し上げて来たとおりの、『華嚴經』という經典は非常に複雑で読みにくい經典です。では何故このように難しく複雑な構造になっているのかここ五年ほど集中的に考えてきましたが、少し見えてきたところがあります。もう少し徹底して『華嚴經』構造論のようなものをまとめたかと思っと思っています。『華嚴經』の解説書ではなく、『華嚴經』という經典はこういう構造になっていて、こういうことが言いたい經典だから、こういう点に注意しながら読めばいいのですよというものです。金子大栄先生に『華嚴經概説』という本がありますが、その書き直したいなものをイメージしています。金子先生を超えることなど到底できませんが、今日の我々の目から見ると「ここはもう少しこうではないか」「ここはこう考えるべきではないか」という箇所がいくつかあります。金子先生が残された『華嚴經概説』は、今となつては言葉も古いですし、一般の方々や学生諸君には読み難いものでしょう。ですか

らリライトして多少の補正をする、そういうものが必要だなと考えています。『華嚴經』の解説書はたくさんあるようですが、本質を解き明かすようなものは少ないです。經典に書かれていることを説明しているだけです。説明だけなら読んだ方が早いですから要らないですね。何故こんなことになっているのかというのが大事で、それが書かれている本は『華嚴經概説』一冊しかありません。薄い本ですがそれ一冊だけです。ですからそれを現代の言葉に書き直して、学生諸君にも読めるようなもの、そういうものを残しておきたいと思うのが一つです。

次に佐々木先生の仰った『教行信証』の三部經という概念を明確にしたいと思っています。これは親鸞の浄土真宗という教えが大乗仏教の思想の中でどういうところに立っていて、何を課題としているかを明確にすることに他なりません。親鸞の課題は分かりますが、それは大乗仏教の思想史において、どういうところに立っているかを整理しておきたい。これは『華嚴經』研究、『涅槃經』研究と繋がっています。

もう一つの大きなものとして、日本における仏教土着の過程における親鸞思想の位置づけを明確にしたいということがあります。飛鳥時代の仏教公伝から奈良・平安そして鎌倉時代に至るわけですが、仏教が日本人に受容され土着して、その中から日本の仏教という形が出てくる。そうした過程の中の親鸞の立ち位置を明確にしたいというのが二つ目です。日本における仏教の土着は聖徳太子信仰という視点から窺えるのではないかと予想しています。この点は歴史の先生方と一緒にやってきたことなのですが、時代社会の変わり目にそういうものが形をとっていて、そこに日本の仏教受容のターニングポイント、メルクマールがあるのではないかと考えているのです。何かしらの新たな課題があって、それが数百年に一度新しい太子信仰として登場するのではないか。それを親鸞は全て受けとめながら骨髄胎するようなことを述べているわけです。ですから日本仏教の受容史の中の親鸞の立ち位置を、聖徳太子信仰と重ねながら考えてみたいのです。末法という問題がありますので、末法と聖徳太子信仰はどう繋がっているのか。この点について考えているところであり、誰かヒントがあれば教えていただきたいです。

それから最後にもう一つ。これは木越学長にお願いです。佐々木先生の没後すぐに全集がまとめられて六巻あります。別符了榮という方が主となって編集されました。この方が短い間に資料を集めて、限られた時間の中で今の六巻の全集を作ったのですが、載らなかつたものが多数あります。それで編集者の別符さんは「限られた時間の中でまとめたものなので、漏れたものは後の人がやってほしい」と記しています。それ故、全集の補遺が必要だと思うのです。安富先生が在職中の時、真宗総合研究所の指定研究の学事史のなかで一度取り組んだことがあり、全部調べて目録を作り手に入る論文のコピーは収集して整理してあります。親鸞聖人七百五十回御遠忌の時に学事史研究は一旦中断し、そのままになっています。中断当時の当局は御遠忌が終わったらまた考えようことだったのでしたが、その後当局が変わりそのままになっているのです。それで、未収録文献の目録もあり、コピーも研究所に保管されていると思います。探せるものは探して、編集の必要はないので編年体の補遺をぜひ作りたいと思っています。

二〇二二年は、大谷大学が「大学令」による大学となつて一〇〇年目です。また、聖徳太子の千四百回忌にも当たります。さらにその先二〇二五年は佐々木月樵の百回忌に当たります。いろんなことが重なり用事が多いですが、全集の補遺は資料が粗方揃っているのです、やればできるのではないかと思います。ぜひ木越学長、よろしくお願いします。中間総括として、これまでこんな風に学んできて、今こんなことを考えているとお話ししてきました。私はご恩を頂いてばかりですので、これを何とかお返ししたいと思っています。頂いたほどのお返しすることはできないと思いますが、体が動く限りはご恩報尽のこれからを生きていきたいと思っています。体は至つて元気なのですが目がボロボロになつてきました。特に夜、大蔵経を読むなどは難しくなつてきましたが、良いルーペを手に入れて、やりたいと思います。大学は今年度で定年退職ですが、研究や仏法はどこかで終わりということはないので、力の続く限り、体の動く限りこれからも一緒に学んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。以上です。